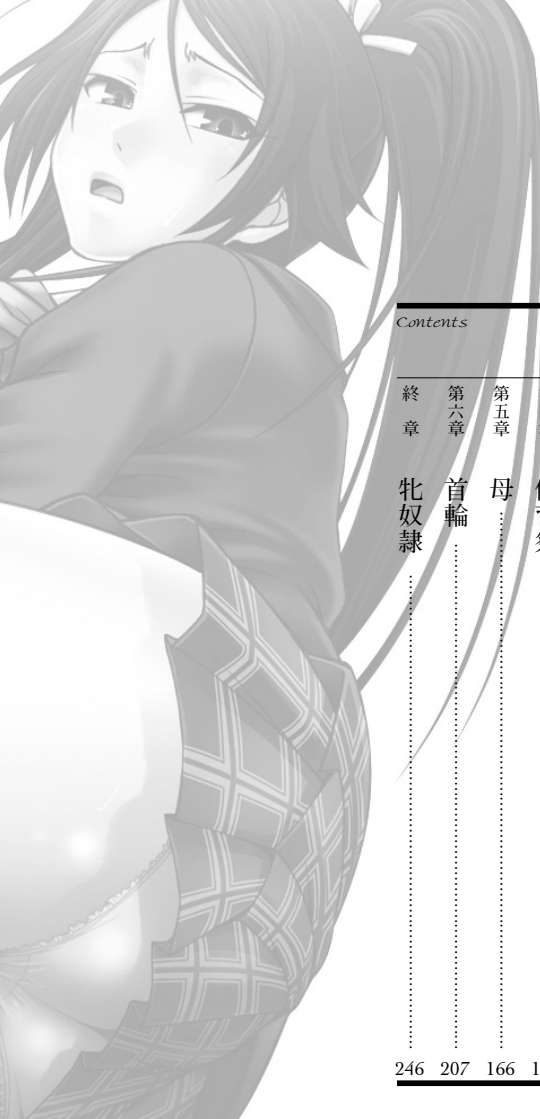




# 牝奴隷飼育学園

筆祭競介  
挿絵 / チバトシロウ

リアルドリーム文庫 / PDF立ち読み版



Contents

目次

終章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
牝奴隸	首輪	母	体育祭	飼育	理事長	転校	母子家庭
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
246	207	166	125	79	41	15	4

## 登場人物

Characters

### 織戸 香澄

(おりとかすみ)

母が働きに出るため、全寮制の聖清学園に奨学生として転入した少女。素直で誰にも優しい性格。

### 織戸 志津子

(おりとしづこ)

夫を事故で亡くし、看護師から高級介護サービス会社に転職した香澄の母。優しい物腰の落ち着いた女性。

### 黒沼

(くろぬま)

聖清学園の理事長。ガッシリとした体格だが、温和そうな見た目の四十代の男性。

### 羽野 柴

(はのしば)

聖清学園のオーナー。やせ細った体躯にかかわらず、貫禄を感じさせる尊大そうな老人。

「……くっ」

顎をしゃくくるようにして睨んでくるその顔は、脅しをかけるヤクザそのもの。

少女の想いなど関係なく、後ろに突き出すようにしている尻を老人にペシんと叩かれる。直後、ウエストを掴まれてさらに尻を下げられた。

ぐっ——とすでに蜜液を滴らせている女の入り口に、先端の丸い肉塊が押しつけられる。目視で確認できなくても、それが羽野柴の男根なのは間違いない。

枯れ木のような身体付きなのに、香澄の股間に押しつけられているソレは、まるで別の生き物のように生命力に溢れていた。

若い牝を求める欲情にドクドクと血が滾り、熱く漲っている。

「ああつ、だめつ……入れないでっ……い、いやつ、そこはダメええつ」

ツインテールを振り乱し、両の瞳からはいつの間にか涙が溢れ出していた。

老人の男根は迷いなく、少女の入り口を探り当てる。

身の毛がよだつような状況にもかかわらず、性の味をたっぷりと教え込まれた肉体は牝の反応を示していた。欲情を剥き出しにした老人の愛撫にすら過敏に反応し、奥まで潤みきっている。

弾力に溢れた大陰唇の盛り上がりの狭間に、しっかりと肉傘の張った剛直があてが

われる。ローズピンクの花弁がひくつき、青筋を立てたペニスをその華芯へと誘い込む。咲き始めた乙女の牝華を、まがまがしい老人の肉杭が貫こうとしていた。

ずるン！

少女の女性器は、なんの抵抗もなく老人の生殖器官を膣内に受け入れてしまう。

「おおうつ……おおおうつ……しやまらんのおおおつ」

孫と言つて過言ではない相手との結合に、羽野柴が感嘆の溜め息を漏らす。

根元まで埋め込まれた男根はさらに力を増し、表面に浮く血管をさらにドクドクと膨張させる。そんな牡肉の興奮に呼応して、蜜壺を埋める膣壁たちが卑猥にざわめき舐めるように絡みついていく。

ずるつぬるつぬるうううううつ。

羽野柴が腰を引き、そしてゆつくりと突き出してきた。

年寄りらしい緩慢さで男根が膣内を一往復する。

「あつ……あああ……つ……あああ」

香澄は両目を見開いて、その現実を噛みしめていた。ぬちゅぬちゅと粘っこい音を響かせながら、剛直した肉棒が膣壁を擦っていく。

処女を失うまでは、心の底から好きになった相手にしか生涯許さないと思っていた。

その乙女の牝粘膜に、羽野柴のような男の生殖器を直に味わわされている。

涙が溢れた。何よりも香澄の瞳を濡らしたのは、自分が漏らす声に、明らかな愉悅の響きが混じっていたことだ。

胸に溢れる嫌悪感も、背筋を駆け抜けていく快感に塗り潰されていく。

女を知り尽くした中年男に牝の快感を教え込まれた膣壁たちは、これほど心が嫌がっているのに、中のペニスに積極的にぬるぬると絡みついていく。

——嘘だよこんなのっ！ アソコが勝手に……勝手に反応しちゃうなんて！  
自分の身体が信じられない。

「ち、違うのおっ……こ、こんなの違うのっああんっ！ あっあああああ！」  
否定の声が、皮肉にもより深い愉悅の色を響かせた。

「なにかちかうんしゃあ。まんちよヌルヌルきもちよしやそうらろお」

老人は餓鬼のようにぼっこりと膨らんだ自身の腹と、香澄の小尻を捏ね合わせるようにゆっくりと腰を揺すり始めた。

高齢のためか腰を振り立てるような激しい動きはない。

膣壁の溝を数えでもしているように、ねっちりと肉棒が擦っていく。

しかしその緩慢な腰使いだからこそ、少女の喘ぎ声を糸を引くように長くさせた。

「ええのう、ええのう。おしようしゃんのなかはてんろくらあ」

菌のない口をぱっかりと開き、羽野柴が恍惚の声を上げる。

劣情に燃える肉棒を蜜壺に埋め込み、まるで水飴でも練るように、溢れる愛液を掻き回してくる。

激しく膣壁を擦り上げられるのもたまらないが、こんなふうには身体の内側をじつくりと責められるのもたまらない。

剛直した肉傘を使い、膣壁をズリズリと磨り潰すように蠢かさせられている。

「そ、そんなに、つくふあつ！ お腹の中をつごりつごりつああつしないでええつ！」

拒絶のセリフを口にしても、その声には明らかに官能の色が混じっていた。

続けて『感じすぎちゃうから』と口走りそうになり、慌てて飲み込む。

そして、繰り返す拒絶のセリフがいつしか自分に向いていることに気づいて愕然とする。嫌というのも、やめてというのも、相手ではなく自分に言い聞かせるためだ。

醜悪な老人とのセックスに、自分が溺れないように……。

長机を掴んでいる手に血管が浮くほど力が籠っているのが、悔しさのためなのか、肉悦を噛みしめているためなのか区別がつかない。

「おつと。今さら抵抗するんじゃない」

前に逃げようとしても、体操服に包まれたままの上半身を黒沼に押さえられる。快感の喘ぎ声を絞り出し、愉悦にヒクつかせる自分の反応を男は満足そうに眺めていた。口許に張りついている笑みは、自分の仕事の出来に満足している職人の顔だ。

「おおつきもちええっ、きもちええのおおっ」

対して老人の呻き声は、まるで子供のように無邪気だった。

楕円を描くようだった腰の動きが、前後に揺れ始める。

膣壁を擦るペニスのあたり具合が変化した。子宮を直接小突かれる圧迫感に、喉元に迫り上がってくるような快感が迸る。

「つくふあああああ！ だっだめえっ！ こっ、こんなの嫌っ！ 嫌なんだから！」

香澄の絶叫は、誰が聞いても愉悦の叫び声だった。牝の喘ぎ声である。

もう『だめ』にも『嫌』にも言葉としての意味はない。

情性で繰り返しているだけだった。

頭の中にピンク色の霧が発生し、意識が朦朧としてくる。

まただ。性の味をたっぷりと教え込まれた若い女体が、セックスに溺れていく。

ツインテールを宙に跳ね上げるように頭を振っても、ピンク色の霧を振り払えない。

——嫌なのにつ！ こんなセックス、気持ち悪くてたまらないハズなのにつ！



ギョッと閉じた臉から熱いものが溢れ出す。後ろからの突き込みに合わせて悔し涙が珠になり、ぼたぼたと長机のガラス面に落ちていく。

相手が誰だとか関係ないのだ。

濡れた女性器に、剛直したペニスを突き入れられれば感じてしまう。

官能のスイッチが入ったように身震いし、恥知らずな喘ぎ声で叫んでしまう。

その浅ましい自分の身体に絶望し涙が溢れた。

しかし、その程度の雨で女体を燃やす業火を消せはしない。一ヶ月かけてじっくりと黒沼に植え込まれたマゾの種子たちが、その涙を糧に次々と芽吹いていく。

怒りや憎しみの感情すらも、被虐の快感となつて女体にフィードバックされていく。牡肉の鋏で挟られ続ける膣襞の一枚一枚が愉悦にざわめき、醜い下腹に打たれる牝尻までもブルブルと官能に震わせる。立ちバックの姿勢を維持する両脚が肉悦を支えきれなくなり、ふくらはぎをビクつかせながら内股になつていく。

グジュぬちつくチュン。ずちぬちゅつぬるるつ。

羽野柴の動きが結合当初に比べ随分と大きくなつてきた。激しくはないが、まるでうどんなの生地でも引き延ばすようにスパンが長い。

男性器が、その干からびた身体付きからは想像できないほど充血している。

上向きに反り返ろうとする肉棒に骨盤の裏側を強く擦られて、ああん、と鋭い喘ぎ声を発してしまった。

——す、すごく……感じちやうとところに……っ……あたつてるっ！

肉同士を直接交じり合わせる快感に腹筋が痙攣し、年老いた男の下腹に叩かれている小さな双丘が淫らに跳ねる。

老人の緩慢な突き入れに全身を揺すられ、ツイーンテールがサラサラと揺れた。

香澄の口からは、今はもう繕いのセリフすら消えている。甘い声しか出ていない。

「あっああああああああああああっ！」

男根の出し入れに合わせて、母音まみれの喘ぎ声が粘っこい高低を繰り返す。牝の性欲を刺激せずにはいられない艶声に、老人の動きがとうとう加速し始めた。

それでもまだ、パンパンと下腹で尻を叩く音はどこか粘っこい。

羽野柴の突入にキレがないだけに、黒沼に馴染み始めた女体にはそれが逆に新鮮だった。緩慢な動きが牝の肉筒を内側から捏ね上げるような効果をもたらしている。

体操服をぴちつと盛り上げている乳房が合わせて前後する。織戸、の名札が縫われた体操服に乳首が擦れ、ビリビリと甘い肉悦を響かせた。

突発的に顎が上がり、抑えきれない快感を音に換えて口から吐き出す。真後ろから

逆る粘りつくような官能に、涎を垂れ流してよがり鳴く。

——気持ちいいっ！ アソコが溶けちゃいそうなほど気持ちいいっ！

体操服の上だけをを着て、立ったままミイラのような老人に尻を抱かれている自分の自分ならそれだけで吐いていたかもしれない。

それなのに今はどうだ。

こんなに感じている。腹の底から喘いでいる。

立っていることすら覚束おぼつかず、今にも白目を剥きそうだ。肩甲骨が悩ましげに体操服をうねらせて、背筋がビクビクと愉悦で震えている。

——お父さん、お母さん……ご、ごめんなさい……。

老人相手のセックスでも、こんなに感じてしまう女になってしまいました。心中で両親に謝りながらも喘ぎ声が止まらない絶望感が、さらなるマゾの愉悦を生み出す。

正直、もうイキそうだった。理性が遠のき悦楽だけが意識を占拠し始める。

自分が失った大切なものを忘れようと、官能の世界に心身が深く溺れていく。

膣壁をゴリゴリと擦られる壮絶な肉悦は相手が誰でも変わらない。亀頭の肉傘がしっかりと張っていて、熱くて、硬くて、太いペニスならなんでもいい。

無意識のうちに後ろに突き出す小尻をクイクイと自ら揺すり始めていた。バストの揺れがさらに増し、体操服に擦れる乳首からなお一層の愉悅がビリビリと弾けだす。

「ああっ！ きき、きちもイイっ！ おちんちんが奥にあたって、んはっ感じちやう！」

官能の涙で濡れる瞳が焦点を完全に失った。香澄は自分のスイートスポットに、肉棒の盛り上がりを夢中で擦りつけ始める。

「わしもらろお。おしようしやんのおまんちよきほしいいろお——ひよほっ！」

ただでさえ若い女体が、絶頂直前の息みを見せながら中のペニスを強く引き絞っているのだ。これに少女自身の淫らすぎるひねりや押しが加わるのだからたまらない。老人が仰け反り膣内のペニスがギンと硬度を増した。

「おおうつおおおうつ！」

羽野柴がまるで鬨とぎの声を上げる老兵のように、顎を仰け反らせて吠え始める。

相手の興奮も最高潮に達したようだ。筋張った両手で香澄の腰を掴み、ぽっこり膨れた下腹を叩きつけてくる。

まるで発作でも起こしたような小刻みな突入を繰り返す。

それでもやはり、黒沼のような野獣めいた力強さはない。そのカクカクした矮小な動きは、交尾中の牡猿にそっくりだった。

それに合わせて自ら尻を振り続ける香澄は、発情した牝猿である。

母親譲りの美貌を悦楽に歪ませ、若々しい肉体を官能の赴くまま躍動させていた。

「なんでなのとおおお！ ああつ！ お尻が勝手にうごいちゃうよおおおつ！」

四肢で踏ん張りながら体操服をくねらせ、汗と涙を周りに飛び散らし、牝との交尾に夢中になっている。ぐちゅぐちゅと淫靡な音を奏でながら、透明な愛液が年老いた牝肉と若い乙女の牝粘膜の狭間で粘りつく。

激しい肉の交わりによって空気と攪拌され、白く泡立ち始める。その淫液が二人の内股から太腿にかけてを伝い落ちていく。

「いくろおつ、なかれいくろおつ！」

羽野柴が歯のない口で中出しを宣言した。

肉悦に沸騰していた頭が冷や水でも浴びせられたようにハッとすする。

黒沼相手のセックスでは、いつも外出しだった。

身体の中にザーメンを注がれたことはない。

もし相手が年老いた老人でも、精液を子宮に吐き出されれば赤子ができる。

ゾツとした。皮と骨だけでできているような干からびた老人でも、これほど猛々しく勃起しているのだ。まだ発射は可能なのだろう。

「ダ、ダメだよっ！ あはああんっ！ そんなのぜっつたい、らめらからああああ！」  
香澄はツインテールを振り乱して、嫌、ダメ、と今さら拒否の言葉は何度も口にし  
た。しかしその声はセックス当初と同様、はらわたを揺さぶるような牡猿の突入によ  
つて、悦楽の咆哮に変えられる。自分の意思とは関係なく、膣壁たちは愉悅を与えて  
くれる肉棒に絡みつき、熱い愛液を溢れさせ続けていた。

まるでそこから噴き出る精液をねだるように、貪婪に蠢いている。

「つゝゝゝ!!」

唐突に理解した。頭ではなく、身体が答えを知っていた。

それが本来の機能なのだ。

この身体を焼き尽くす業火のような快感は、牝の本能からくる喜び。

子宮が初めて与えてもらええる子種汁を渴望し、歓喜で啜り泣いている。

「おおおうっ！ かしゆみっ！ かしゆみいいっ！」

名前を呼び捨てで叫ばれた瞬間、まるで精神までも汚された感覚に陥り、それがマ  
ゾの愉悅となって顎を大きく仰け反らせた。

直後、ミイラのような筋張る指が、少女の白い尻に深く食い込む。蜜壺から与えら  
れる快感によって、老人の男根が骨の塊のような硬度に達した。そんなペニスで膣壁

を削るように擦り上げられ、さらに膣壁が内側に向かって収縮する。

牝肉が牝肉に悦樂を与え、その反動で牝肉が牝肉を悦ばす。

性の摂理が歳の離れた男女の交わりをさらに同調させる。

白く泡立つ愛液でドロドロになったローズピンクの牝弁たちが、青筋立てた赤黒い肉棒を極限まで絞り込んだ。

その瞬間、発作を起こした老人がまさに昇天でもしたように。ピタリと動きを止める。張り詰めきった男根は、香澄の子宮孔にずっぷりと突き刺さっていた。

どりゅんっ！ ドブどぎゅどぶんっ！ どぶドリユどぎゅんっ！

「あつくふあっ！ なかはだめえええっ！ な、なかだしイヤあああああっ！」  
身体が一番深いところに初めて浴びる獣欲の爆発に絶叫する。

若々しい尻肉に骨のような指を深く食い込ませて、羽野柴は孫のような歳の少女に中出しをキメた。老いたボス猿が、子猿の牝に種を注ぐ。

老人とは思えない大量のザーメンが、乙女の子宮にどぶんどぶんと流れ込む。

「うっ、うっ、おっ、うっ——」

羽野柴は菌のない口を、酸っぱい梅干しでも含んだように窄め、悦樂の呻き声を脈動に合わせて漏らし続けていた。

丸い尻を掴む枯れ木のような指には、ぽつきりと折れそうなほど力が入っている。最後の一滴を吐き出すまで、絶対にこの結合を解かないという貪欲さが、その指先に籠っていた。

「あああああ！ おおおおあああああ！ あああおあああああああ！」

それを受ける少女の絶叫は、愉悅に染め抜かれた母音のみ。全身が燃え尽きそうな灼熱の濁流が、香澄の意識ごと根こそぎすべてを絶頂の彼方に押し流す。

腹の中をたっぷりと満たすザーメンの圧迫感に、気が狂いそうだった。絶頂直後で感度の上がりきった膣内を、無数の精子の群れに喰い荒らされていくようだ。

それでもなお、どっふんどっふんとザーメンが注ぎ込まれ、小刻みな牝爨の溝の底まで白濁色に浸される。香澄の絶叫がさらに長引く。

そして膣内を一杯に満たした愛液とザーメンの混合汁が——ぶプアああああッ！盛大に股間から溢れ出した。

ペニスと膣の僅かな隙間を逆流し、勢いよく飛び散っていく。

まるで香澄がお漏らしでもしているような光景だ。それでもなお、ビチャビチャと膣口から中出しザーメンを噴出させ、香澄はイキ続けた。

妖怪のような老人の生殖液を、子供を宿すための牝器官に注がれる絶望感すらも、





初中出しの絶頂感に燃やし尽くされる。

「ああー。つあああー」

全身をプルプルと震わせ、牡の排泄を終えた老人が深い溜め息を漏らした。

ゆつくりとペニスの中から引かれる。半ば剛直を緩めていた肉棒は、粘っこい糸を引きながらだるんつと緩み抜け落ちた。

結合が解かれた羽野柴の股間は、もわつと湯気が立ちそうなほど愛液で濡れ光っていた。

「きもちえかったあー」

行為中は掴んで放さなかった香澄の尻を、老人はぺちんと片手で叩いてから、興味の失せた玩具のように手放す。

獣欲を満たしたボス猿は、腰が抜けたようにソファーにドカツと腰を下ろした。気だるそうに上着の胸元から葉巻を取り出す。

自分の生徒が犯される一部始終を見ていた学園の理事長が、老人の唾えた葉巻に自らライターを取り出し火をつける。建物内はすべて禁煙の学校のまさに中枢で、学園のオーナーは美味そうに紫煙を吐き出した。

「つ……つあふああ……」

尻を後ろに突き出すような姿勢で、老人の劣情をすべて受け止めた女子生徒は、糸の切れた人形のように長机の上に崩れ落ちた。

絶頂の余韻にビクビクと腰を痙攣させたまま、両目を見開いて荒い呼吸を繰り返している。その瞳には、この場で転校の面接試験を受けていた時の、希望に溢れた輝きは欠片も残っていないかった。

健全さとは真逆のマゾの色香と、底知れない絶望感が濃い影を落としている。

今の行為でデキてしまったかもしれない。

その恐怖と、どんな相手とのセックスでも容易く絶頂してしまう、自分の身体の浅ましさに涙が溢れた。いまだヒクヒクと全身を痙攣させている絶頂の余韻こそが、少女を深く絶望させている。

「ええしりらったわ。ま○この締めりもたまらんかった」

ふしやしゃしゃしゃ、と歯のない口で笑いながら、目の前で横になる抱いたばかりの少女の尻を撫で回してくる。

香澄はギュつと拳を握り締めた。

「……………お、お母さんに……………会わせて」

今、香澄がギリギリで自我を保っていられるのは、母を思う気持ちが残っているか

らだ。羽野柴が行為中に漏らした『シヅコ』という言葉も気になっている。

絶頂直後で気だるい身体をなんとか起こし、自分を陵辱したばかりの老人を睨む。

「ひよほっ」

羽野柴は目を丸くして、葉巻を唾えたまま楽しそうに含み笑いを始めた。歯のない口は、震える唇の動きに合わせてプカプカと葉巻の煙を漏らし続ける。

その骸骨めいた容貌と併せて、まるで靈気を吐き出す妖怪のような姿だった。

こんな男に犯されながら、あんなに派手に喘いでいたかと思うと、今すぐにも自分の舌を噛み切りたくなる。

対して羽野柴は一通り笑ってから、横に控えていた黒沼に顎をしゃくる。

中年男は老人に向かって一礼すると、香澄に顔を向けた。

「週末だ」

「……えっ？」

「今週末に、母親に会わせてやる」

事前にそういう話が、目の前の二人の間で交わされていたようだ。

「しよのかわりっ」

もわわわっ、と靈気みたいな煙を吐きながら、羽野柴の顔が目の前にやってきた。

涙に濡れた瞳を、糸のように細めた目で覗き込まれる。

「の」

一言だけそう口にして、ねつとりと唇を塞がれた。

——おかあさんに……あえる……。

香澄は唯一と喋っているその希望だけを見て、他のことには心を閉ざすことにした。  
「んっ……んんんっ……」

老人の舌がぬるりと入り込んでくる。

黒沼のヤニ臭い舌と違い、葉巻の匂いが溶けた唾液は苦味がとても濃厚でほんのりと甘さも感じる。

同じタバコでも葉巻と他ではまったくその煙の質が別モノであることを、二人の男とのキスで香澄は覚えた。

羽野柴に命令されるまでもなく、志津子はより頭を持ち上げて、その美貌を醜悪な尻の谷間に密着させる。相手の尻を支える彼女の手にも力が籠っていた。

「はああんっ——いっつれえつくらさいっ。ジュルんっハアあ……しずこのけつなめへろへろれえ、おっぱいにどぶどぶしてくらさいい」

志津子の声は奉仕する喜びで蕩けきっていた。

しかしその熟れた身体は満たされていない。

これだけ離れた位置からでも、彼女の乳首がガチガチに勃起していることが確認できる。スパッツを穿いたままの太腿も、悩ましげにモジっていた。

その渴きを癒やすように、夢中で舌を踊らせているのだろう。

スピーカーから聞こえてくる、ベチョベチョという湿った音の激しさは、耳に煩いほどだった。

「おおっ。イクぞっ。おおっ、おうおおおおっ！」

一方的に奉仕を受けている老人が、限界を叫んだ。

緩んだ尻がビクンと震えたその直後、きつく寄せ合わせた豊かなバストを羽野柴自らが揺すり立てる。中に埋もれた肉棒を、柔肉の谷間で扱き上げる。

どりゅんっ！ どびゅびゅうっ！ どぐどりゅんっ！

直後、乳肉の深い狭間から、白濁の粘液が勢いよく飛び出した。

初弾、二弾目と妊娠腹に直撃したが、あとは射精が緩み始め、腹から下乳の間にトロトロと流れ落ちていく。

「おおおっ……っおおおお……」

牡の脈動が終わっても羽野柴は全身を息ませたまま絶頂の呻き声を上げている。

その間も志津子がずつと後頭部をベッドから浮かせ、老人のアナルを舐め続けているからだろう。そうして赤子を宿したポテ腹を、老人の欲情に汚され続けている。

羽野柴は完全に絶頂感が去ってから、深い余韻の溜め息を漏らした。献身的に尻を支え肛門を舐め続けた看護師に一言もなく、膝で歩いて身体を前にずらす。

「ほれほれ。ひひひつ。赤ん坊には栄養たっぷりミルクをやらんとう」

羽野柴がまだ硬さの残った男根を使い、腹の上部にへばりついている白濁の盛り上がり塗りを伸ばし始めた。

皺に埋まる両目を興奮に血走らせ、口の両端が吊り上がっている。

女を汚す行為が楽しくってしかたがないという表情だ。夢中で己のペニスを動かしている。老人の剛直はすぐに緩み始めたが、魚肉ソーセージのように芯のない肉棒で構わず陵辱を続けていた。

「レロんちゅんっ、あ、ありらとう……んんんっ、ごらいますう……んちゅんんっ」  
その間すら志津子は精一杯頭を持ち上げ、窮屈な姿勢で老人の尻の谷間を舐め続けている。舌を奉仕で踊らせながら、羽野柴のセリフに礼まで返している。

腹にぶちまけたザーメンの上半分ほどを塗り伸ばした段階で、羽野柴が一通りの陵辱行為に満足したのか「もういいぞ」と呟いた。

その皺くちゃな顔には、一つの遊びに満足し次の新たな遊びに期待する、子供染みた笑みが張りついている。

対して志津子は『もういいぞ』の命令を聞いて、初めて後頭部をベッドに落とした。こちらは忠実な牝奴隷そのものだ。

たつぷりと弄ばれた胸を上下させ、軽く息を乱している。

しかしその頬は赤く上気し、満足感すら漂わせていた。

羽野柴はドカリとベッドの上に尻を落とす。あぐらをかいて未亡人の乳房を再び手にした。しかしそれは一度射精をする前の欲情を漲らせた掴み方ではない。

手頃なところに手頃なモノがあるので弄んでいる。そんな気安い揉み方だった。それだけに志津子の身体を玩具扱いしている意識が余計に透けて見える。

「よし。入ってこい」



唐突に羽野柴がこちらを向いてそう言った。

母のあまりの墮ちっぷりに、棒立ち状態だった香澄はビクリと身体を震わせる。

ベッドの上で奉仕の余韻に浸っている志津子も同様だ。恍惚としていた表情が強張り、自分の胸を弄び続ける老人を不安そうに見上げている。

「……き、今日は……どんな方がいらっしやるんですか？」

これまでも羽野柴以外の男に弄ばれていたことが察せられる質問だ。

その口調と表情から、相当嫌な思いもしたのだろう。

あれほど熱心に奉仕した老人相手に、さらに媚びるような引き攀った愛想笑いを向けるほどに。

泣き叫ぶ母が不特定多数の男たちに無理矢理犯される光景が、香澄の脳裏に浮かんだ。ぎゅつと両目を閉じて頭を振っても、考えることをやめることができない。

「会長がお呼びだ。いくぞ」

そんな女子生徒の首振る行動を、違った意味に捉えた黒沼に肩を掴まれる。

香澄は引きずられるようにして、隣の部屋に移動させられた。

志津子が恐る恐るこちらを向く。

「……か……すみ」

掠れたような声で呟くと、がばつと身体を起こし両目を丸く見開いた。

隣であぐらをかく老人が、その絶望感に満ちた女の表情を恍惚と眺めている。志津子の裸を眺めるよりも、よつぽど興奮しているように見えた。ただの女遊びでは得られない、加虐の愉悅がそこにあった。

「お……かあさん……」

俯きながら上目使いで母を見る。

相手はこちらの視線にハッとすると慌てて顔を逸らした。首に嵌められた革製の首輪を隠すように片手で握り締める。

少女に向けられた耳からうなじのラインは赤く染まり、伏せられた長い睫毛も羞恥に震えていた。眉を八の字に寄せて下唇を噛むその横顔には、見られたくないところを見られてしまった、母の複雑な心境が滲み出ている。

それでいて、あれほどの痴態を晒してなお、楚々とした志津子の美貌に衰えは見えない。両脚をベッドの上で横に流し片手で上半身を隠すその姿には淫靡さまで加わり、娘の自分が見ても、背筋にゾクツとくる濃密な色気が漂っている。

羽野柴がおもむろに立ち上がり、部屋の隅にあるソファーに腰を下ろした。葉巻に火をつけ一服すると、こちらに向かってその葉巻を横に一振りする。

「どうやら『やれ』という意味らしい。

呆然としている香澄を放し、中年男が母のもとに進んでいく。

「あ、いやっ……や、やめてください……む、娘の……前では……いやっ」  
顔を左右に振り続け、口では必死に哀願している。

しかし首から下はズリズリとベッドの上を後退るだけだ。

本格的に逃げようとしたり、抵抗しようとしたりしていない。

——ああっ。これが……あの、お母さんだなんて……。

頭がいくら命令しても、男たちに逆らえない身体になってしまっているようだ。もう二度と、昔の母には戻れない。

そんな取り返しのつかない絶望感が胸の奥に暗く冷たく広がった。

「嫌だと？ まだ躰が足りないみてえだな」

黒沼が、ベッド横のテーブル上に乗っていたチェーンを掴む。

志津子の首輪を強引に掴むと、そのチェーンの端を金具部分にカチリと嵌めた。

「あっ……あああっ……」

母はそれだけでベッドの上を後退ることすらやめてしまう。

左右に振り続けていた顔に、絶望の表情を浮かべてがつくりとうなだれる。

首輪の手綱を握った相手には服従しなくてはならないという絶対のルールがあるような反応だ。その姿はリードに繋がれた牝犬そのものである。

まるで出来の悪い芝居でも見せられているようだった。

目の前の光景に現実感がなさすぎる。

「おら。下を脱いで四つん這いになりな」

黒沼の口調には、学園で理事長をしている時の温和さが欠片もない。

他人を見下し命令することに慣れた、攻撃的な不遜さが漂う声である。

「……………はい」

それに母が従った。まるで催眠術にでもかかったように焦点の合わない瞳をして、自らスパッツを脱ぎ始める。

「な、なにしているのよ……………お母さん……………」

絞り出すように投げかけたセリフは驚きに震え、そして掠れていた。

いつの間にか喉がカラカラに渴いている。

娘の問いかけに母は一瞬だけ全身をビクツと硬直させたが、その動きは止まらない。スパッツに手をかけて、躊躇することなく下半身を裸にする。そしてぽっこりと膨れた妊娠腹を、まるで牛の乳のようにダランと下げて四つん這いになった。腹にへばり

ついでにザーマンが、粘っこい糸を引いてベッドに滴る。

そうしてハート形の綺麗な尻を、黒沼に向けて高く掲げた。

白い双丘は熟しきった牝脂をたっぷりと乗せ、妖艶な丸みを形作っている。肌はきめ細かく張り詰めているくせに、少し動いただけで中の熟肉が卑猥に揺れた。

大人の女が命令通りに臀部を掲げる間抜けな光景なはずなのに、志津子の尻の圧倒的な牝肉の迫力が、この光景をたまらなくエロティックなものに変えている。

「頭を娘のほうに向けろ」

「……はい」

母は四つん這いのまま掌と膝で歩き、身体の向きを変えた。

チェーンの手綱を握る相手の命令には、すべて「はい」と答え従わなくてはならないようなやり取りである。

金で身体を売る娼婦だって、もう少しプライドがあるのではないだろうか。精神の最深部まで調教されてしまっているのが、見ているだけでハッキリとわかる。

——く、悔しい……。

母親のこんな姿を見せられて、怒りを覚えない娘がいるだろうか。

「これ以上、お母さんに何させる気よ！」

四つん這いの母のもとに駆け寄り、身体を抱いて立たせようとする。しかし――。  
「おっと」

少女の行動はあっさりと黒沼に妨げられる。志津子の肩に伸ばした手を掴まれ、関節を極められながら背中方向にねじり上げられた。

「無駄なことはやめろ。そこで自分のママの本当の姿を見学してな」

耳元で囁かれ、掴まれていた手首ごとドンと背中を押される。左手一本で簡単にあしらわれてしまった。男の右手はずっと母のチェーンを掴んだままである。

香澄は前につんのめったが、体勢を立て直して黒沼に向き直った。

極められた右肘を左手で抱きながら、あまりに無力な自分に下唇を噛みしめる。

この間、志津子は四つん這いの格好でジッとしたままで。

薄く開かれた瞳は、魂が抜けてしまったようになんの感情も浮かべていない。目の前のベッドシートだけを見詰めている。

脱け殻だ。以前、あの美しい身体に宿っていた魂はそこにない。

黒沼は自らズボンのファスナーを下ろすと勃起したペニスを露出させた。続けてベッドの上へ乗り、鎖を握っていない左手で剛直を握る。

対して志津子は四つん這いのまま、お座りを命じられた牝犬のように動かない。

男はチェーンを掌にひと巻きして腰を掴む。そして握ったペニスで未亡人の尻をペチンと叩いた。

母がまるで焼きゴテでも押しあてられたように、全身をビクつと震わせる。

「おい。いつものおねだりをしろ」

黒沼が何かを促すような命令を下す。

その間、たつぷりと牝脂の乗った未亡人の尻に中年男の剛直がめり込んでいる。牝肉の埋まる深さ加減を見ただけで、牝尻の芳醇な柔らかさを想像させた。

志津子がますます顔を伏せる。

香澄の位置からだと表情がほとんど窺えない。

長い黒髪を後ろでまとめ、剥き出しになっているうなじがより赤く染まる。

母はその横にした頬をベッドの上に落とした。斜めになった上半身を顔と胸で支え、まるいポテ腹を圧迫しない空間を確保する。

そして両手を自身の尻に向かわせる。牝の劣情を誘うために盛り上がったとしか思えない丸い牝肉の塊を自ら掴んだ。むにゅうつ、とありもしない効果音が聞こえてきそうな弾力で、それが左右に開かれる。

獣が——犬や猿の類いが発情期を迎え、牝に性交を求める姿そのものだ。真後ろで

膝立ちをしている男には、女性器も肛門も丸見えになっているに違いない。

黒沼がおもむろに顔を上げた。

シヨック状態の女子生徒を見て、口許をニヤリと吊り上げる。

「おい。お前の出てきた肉穴、ちんぽが欲しくてびちよびちよにエロい涎を垂らして  
るぞ。くくつ。ケツの穴までモノ欲しそうにヒクヒクしてやがる」

母のあまりに変わり果てた姿を見せつけられ、棒立ち状態になっている香澄にさらに  
追い打ちをかけてくる。少女の精神に一生消えぬであろうトラウマを、がっちりと  
刻み込むつもりなのだろう。

部屋の隅で葉巻を吸っている羽野柴も似た表情をしていた。

肉体だけを犯すのでは飽き足らず、心の深いところまで踏み込み陵辱する。人を傷  
つけることに無上の喜びを感じる生粋のサドたちだった。

「あつ……は、はいつてくるつ……うああああ……」

志津子の口から低い喘ぎ声が漏れだした。

黒沼が娘の処女を奪った男性器を、その母親に埋めていく。

「つ……さすがにボテ腹マ○コは——おおう、肉の詰まり具合が違うぜ」

妊婦との結合に男が満足そうな吐息を漏らす。



「つあ——ご、ご主人さまの……太いおちんぼ……つくふつ……つ……」

志津子は自身の尻を掴んでいた右手を放し、口許を押さえた。そして左手はきつくシーツを握り締める。

腕が筋張るその力み具合に、喘ぎ声を必死で耐える母の気持ちが見えた。

薄暗い体育倉庫で、黒沼の責めに必死で耐えていた自分の姿がダブって見える。己の頬に爪が食い込むほど、石灰臭いあの狭いスペースで必死に喘ぎ声を抑えていた。

だからこそ、自分が犯されているように実感できる。

指先にそれだけ力が籠るほど、母の女体は愉悦を感じているのだ。

「ほら。いつもみたいに思いっきり喘げよ。そのほうがずっと気持ちいいぜ」

黒沼はねちっこい腰付きで志津子の女体を抉り始めた。深く埋めた剛直で、未亡人の牝筒を内側から捏ねるようなひねりを加えている。

必死で口許を塞ぐ指の隙間から、くぐもった喘ぎ声が漏れ続けている。

「つ……ふぐつ……つ……つはあああ！」

耐えきれなくなつた未亡人が、とうとう顎を仰げ反らせて絶叫した。

香澄を意識して一時は回復し始めた瞳の輝きがあつというまに霧散していく。焦点がぼやけ、愉悦一色に染まっていく。

「あつ、あつ、あああつ、あつ——」

男の腰使いは志津子の弱い部分を知り尽くしたモノだった。愉悅の色を濃く響かせる母音の連なりは、後ろで腰を蠢かす陵辱者の動きと完全にリンクしている。

「どうだ、おら。腹の奥から舐めるようにチンポに絡みついてきやがってよお。ご主人さまのセックスがそんないいのか。あん？」

「あつあついいいっ、気持ちいい……き、気持ちいいですう——んはああつ！」

「そこに立つてる一人娘を見ながら言ってみろ。アンタをひり出したオマ○コが、今どんなふうな気持ちいいかをよお」

黒沼の口調はもう完全にチンピラのものだった。

初めて出会った時にはあんなに温和だった表情は、美しい未亡人の肉体と精神を陵辱する行為に興奮し醜く歪みきつている。

「あつあつ……ごめんなさい……ああつ、香澄ちゃん……ママ、おちんぼ……気持ちいいのお……奥のほうまでズリズリされると……あ、頭の中が真っ白になって……オマ○コがとけちゃいそうで、あつああああああ！」

パンパンパンパンズパパパンツ！

男が女を貫く音が、香澄の耳にまで聞こえてくる。

志津子は切れ長の瞳を見開き、その端から愉悅の涙を流しながら絶叫していた。

綺麗に通った背筋は収まりきららない快感で痙攣し、抱かれる尻は男の下腹で打たれるたびに次の突入を誘うように揺れ動く。艶やかな頬は官能的なピンク色に染まり、その表情には明らかな被虐の愉悅が滲み出していた。

骨の髄まで夫以外の男に征服されてしまった牝の姿だ。

「もつとよおおく、お母さんが感じまくっているところを娘に見せてやろうぜ」

黒沼が志津子の太腿の付け根あたりを掴むと強引に引き上げた。

後背位で結合したまま二人は立ち上がる。

あまりに不安定な姿勢の妊婦が、自分のウエストを掴んでいる男の手を握る。まるで黒沼にすがっているような姿となった。

男は見下した笑みを隠そうともせず、おらおら、とからかうように尻を後ろから突き出し続ける。

対して志津子は、前かがみの姿勢のままヨタヨタと前に歩を進めた。

ダイナミックに揺れる乳房とは対照的に、丸々と膨らんだポテ腹の動きは少ない。

老人のザーメンを粘りつかせたまま小さく弾むに留まっている。

赤子を宿すその肉体は本来微笑ましい姿のハズなのに、男と交わり喘ぐ光景はたま

らなくグロテスクに見えた。

「お、おかあさん……」

二人の男女が肉をぶつける乾いた音。

愉悅を剥き出しにした喘ぎ声と、その合間に混じる荒い吐息。

官能に緩んだ母の表情と、優越感を隠さない黒沼の笑み。

少女を圧倒するそんな諸々が、ペタリペタリと近づいてくる。

——嫌……。こ、こないで……。こつちに……。こ、こないで……。

本能的な恐怖を感じ、無意識に後退っていた。と、そんな時だ——。

「あつ……。あああつ……」

黒沼の手首を掴んでいた手を払われて、前かがみの志津子が倒れそうになる。

香澄は思わず前に踏み出し、母の身体を支えていた。

「……。か、かすみちやあんつ……」

娘の肩に手を置いて、母が立ちバツクの姿勢をなんとか維持する。

「娘と久々のご対面だからのう。離れ離れの間のことでも教えてやったらどうじゃ」

部屋の間で葉巻を吹かしながら、親子の再会を眺めていた老人の言葉である。その声には、瀕死の小動物をさらにいたぶる子供のような、幼稚な残虐さが滲み出ていた。

「ごめん……ね。香澄ちゃん……お、お母さん……もう、ご、ご主人さまたちに逆らえない身体になってしまったの。さ、最初は……て、抵抗したのよ。舌を噛もうともしたわ……で、でも、香澄ちゃんのことを言われて……ああんっ！」

見開いた母の瞳に、口を半開きにして今にも泣きそうな自分の顔が映っていた。

「最初は……嫌で嫌でたまらなくなつて……でも、だんだん気持ちよくなつてきてしまつて……ああん。だつて一日中、セックス漬けなんですもの。お父さんとはもうずつとご無沙汰だったし」

自ら父のことを口にしても、その色っぽい喘ぎ顔はそのままだ。

「身体の中に直に射精されるなんて……もうずつと昔のことで……それがアソコからザーメンが溢れるぐらいの中に出されて。お、奥に熱いのがあたると頭の中が真っ白になるみたいで……気持ちよくつて嫌なこと全部忘れられたの」

志津子の声からは、すでに嫌悪の響きは聞こえてこない。

自分の語る内容に興奮し、声が恍惚と上擦り始めている。

「お父さん相手にだつてしたことないエッチなこと、散々教えられたの。……真面目なお父さんは、フェラチオだつて滅多に求めてこなかったんだから……。ザーメンの味……初めて知つたわ。オチンチンをおっぱいで挟んだり、お尻や太腿に擦りつけた

り、身体中でご主人さまにご奉仕することを教えられたの」

はあはあ、と香澄の顔に甘い吐息が吹きかかる。

後ろからのねちっこい突き入れに合わせ、呼吸の強弱が揺らぐ。

卑猥な告白をするたびに眉間の皺が深くなっていくのだが、それは苦痛のためではなくマゾの愉悅によるものだ。

未亡人は恍惚とした表情を隠そうともせず、卑猥な告白を続けた。

「……最後には男の人のお尻の穴だって舐めさせられたわ。ご主人さまの後ろに回って、おちんちんをシコシコしながらペロペロするの。最初は嫌だったけど、すぐにどうってことなくなつたわ。今じゃ、ご主人さまが喜ぶのが嬉しくって、夢中で中まで舐めちゃうの。——こんなふうによ」

母が唇から舌を出し、娘の鼻先で宙を舐めた。

ピンク色の肉片がレロレロと卑猥に踊る。

志津子の瞳は完全に焦点が合っていない。

「だって、ご主人さまたちが、私を愛してくれるんですもの。お父さんなんて比べモノにならない。何度も何度もイカせてくれて、何度も何度もセックスしてくれるのよ。意識がなくなつて、それでも抱き続けてくれて、意識が戻った時にもセックスが続き

てて、またすぐにイッちゃって、それが一晚中続くの。母親としてじゃなくって、一人の女として——うんっ、一匹の牝としてたっぷり愛してくれるのよ」

首輪を嵌められ激しく喘ぐ女は、淫欲に墜とされた一匹の牝だった。

黒沼たちに香澄が受けた仕打ちより、さらに酷い責めを受けたのだろう。

精神が崩壊してしまっている。男たちの陵辱を『愛』だと錯覚するほどに。

小刻みに弾むボテ腹の中に詰まってるのが、男たちのザーメンに思えた。

「いろんな人に……抱かれたわ。一晚に何十人にも犯されたこともあった。相手もいろんな人よ……政治家とか、警察の偉い人とか……は、はははは……。浮浪者とか……レズの女の人とか……。中には香澄ちゃんより若い男の子もいたわよ。つくふふっ……そういえば……お、お父さんの元部下だっけ人までいたわね」

立ちバックで繋がる黒沼が、志津子のセリフで興奮しているのか突入が小刻みになってきた。声の揺れが激しく安定しない。

母はガクガクと顎を揺らしながら、虚ろな瞳のまま半笑いのような表情をして、愉悦の涙を流している。

香澄にすがり密着した志津子の身体は、相変わらずしなやかで母の温もりも感じさせた。それだけに、墜ちきった牝奴隷の哀しい姿が胸に鋭く迫ってくる。

香澄はギュッと両目を閉じて「もうやめて」と呟き首を左右に振った。

しかし志津子の告白は止まらない。

「感じちゃうの……。だ、誰に抱かれても……お母さんの……志津子のオマ○コ感じちゃうの……。も、もうだめなの。もうおチンポなしじゃ生きていけないのおお！」

黒沼の激しい突入によって志津子の喘ぎが大きく弾けた。

「イクぞ！ もうそろそろ出してやる！ 意識をマ○コに集中させな！ 腹んの中のガキにたっぷりと栄養をくれてやるぜ！」

後ろに引かれるチェーンがガチャガチャと耳障りな音を奏でる。

志津子の美貌がセックスの肉悦一色に染まりきり、香澄の肩を掴んだ指に痛いほどの力が籠った。官能の涙を流すその瞳が、迫りくるエクスタシーの大波を予感して切なげに細くなる。

射精直前のペニスに対して妊娠腹にも力が入り、全身を息まかせていた。

「ああつ、イイツ！ おちんぼイイツ！ ああつ出してくださいっ！ 浅ましい牝隷のボテ腹オマ○コに、ご主人さまのおちんぼ汁をぶちまけてくださいいいっ！」

黒沼が鋭い呻き声を上げる。

無骨な指が母の尻に深く食い込み固定した。





「ああつでてるううつ！ おちんぼ中出しいっばいでてるうううううううう！」

香澄の肩を握り締める志津子の手が、発作でも起こしたように痙攣し始めた。娘の体操服に包んだ両肩をビクビクと震わせている。新しい生命の宿る子宮内に、さらに生命の原液を注ぎ込まれ、牝としての喜びに陶醉していた。

——お母さんが……イッチャつてる……。

いつも楚々としていて奥ゆかしかったあの母が、目も口も鼻の穴までも一杯に開き、性の絶頂感を叫んでいる。

肉悦の赤に染まったその美貌を涙で濡らし、妊娠腹までも愉悦に揺らし、全身で爆発しているエクスタシーをまったく隠そうとしていない。

目の前で恍惚とアクメ顔を晒す母の姿を、香澄はただただ呆然と見詰めていた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。お問い合わせはこころみ。お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!